

PRESS RELEASE

2021年11月29日

第28回

小学館 ノンフィクション大賞

最終選考結果のお知らせ

大賞

『マイホーム山谷』

末並俊司 (すえなみ・しゅんじ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』2誌主催による『第28回小学館ノンフィクション大賞』の最終選考会（午後5時から）を行い、受賞作を決定いたしました。今回は大賞に『マイホーム山谷』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。

受賞を祝う会は、社会情勢を踏まえた上で、単行本刊行に合わせて執り行う予定です。

PRESS RELEASE

2021年11月29日

第28回「小学館ノンフィクション大賞」 最終選考結果のお知らせ

| 主催 | 株式会社 小学館 週刊ポスト／女性セブン

大賞

『マイホーム山谷』

末並俊司 (すえなみ・しゅんじ)

梗概

東京都台東区の北部にある山谷地区は、大阪の釜ヶ崎や神奈川の寿町に並ぶ三大寄せ場のひとつだ。その中心部に『きぼうのいえ』はある。2002年に誕生した同施設は全国にその名を知られる民間のホスピスだ。路上生活のまま年老いた人や認知症、アルコール依存など心身に深刻な疾患を持っている人、そのほか何らかの理由で生活に困窮している人などを積極的に受け入れ、最期を迎えるまでの時をその人らしく過ごすための場所である。中には保証人がいないなどの理由で一般の病院から受け入れてもらえなかった人も少なくない。立ち上げたのは山本雅基さんと妻の美恵さんだ。全くのゼロから二人三脚で奮闘し運営を軌道に乗せた。きぼうのいえは、今では山谷になくてはならない施設となっている。2010年公開の映画『おとうと』(山田洋次監督)ではきぼうのいえをモデルにした「みどり

PRESS RELEASE

2021年11月29日

のいえ」が登場し、山本さんを小日向文世が、美恵さんを石田ゆり子が演じた。また同年12月にオンエアされたNHK『プロフェッショナル仕事の流儀』では入居者たちの生活を献身的に支える美恵さんの日常が紹介された。きぼうのいえはこれ以外にも多くのメディアで紹介されている。金銭的な損得を度外視し、入居者に寄り添う2人の姿を様々な媒体がこぞって取り上げた。既存の医療や介護システムでは救いきれない人たちに手を差し伸べる2人の姿を見て“理想のケア”と感じる人は多かったはずだ。一部には山本さんのことを山谷のオスカー・シンドラ。妻の美恵さんのことを山谷のマザー・テレサと呼ぶ人もいた。ところが、現在のきぼうのいえに山本夫妻の姿はない。妻の美恵さんは『プロフェッショナル仕事の流儀』がオンエアされた翌日に「これ以上魂に嘘はつけません」との書き置きを残し、男性と2人で失踪した。山本さんはその後、本業をほったらかしにして、山谷全体をきぼうのいえにしたいという無謀な夢を実現させるために奔走し、失敗。2018年にきぼうのいえの理事長を解任された。その後、統合失調症の診断を受け、2020年11月からは生活保護を受けながら山谷でひとり暮らしをしている。2018年の半ばから、私は山本さんと定期的に連絡を取るようになった。山本さんの人生は病気との戦いだった。学生時代からうつ症の症状に悩まされ、ここ数年は統合失調症の症状も強く出るようになった。現在もこれらの病と戦いながらの生活である。そうした日常を間近に見ながら、同時に福祉の世界で生きてきた彼の言葉を聞いているうちに、私は山谷の街で独自に進化した地域ケアシステムの存在を知ることになる。中心的な役割を果たしているのが『きぼうの

PRESS RELEASE

2021 年 11 月 29 日

いえ』『訪問看護ステーション・コスモス』『山友会』『友愛会』『ふるさとの会』だ。この5つのNPO法人に集うケアワーカーたちは、互いに連携を取り合いながら、かつての山本夫妻のように医療や介護の仕組みが行き届かない部分にまで善意の手を伸ばし、ケアを必要とする人たちに寄り添う。理想的とも思えるケアシステムだ。現在の山本さんはこれによって生かされている。山谷にたどり着き、山谷で成功し、山谷でどん底の生活を送る山本雅基さん。どうして彼はケアを提供する側から、提供される側になってしまったのか。山谷のマザー・テレサと呼ばれた妻の美恵さんはどうしてきぼうのいえを去ったのか。これら山本さんの人生に絡みつ়く謎を追う中で見えてきたのは、理想と思えた山谷のケアシステムが、実は非常に危ういバランスの上で成り立っているという事実だった。

｜ PROFILE ｜ 末並俊司

年齢：52 歳

現住所：東京都

職業：介護ジャーナリスト

1968年、福岡県北九州市生まれ。日本大学芸術学部卒業後、運送業などのアルバイトを経て、97年にテレビ制作会社『オフィス・トゥー・ワン』と契約。『BB-WAVE, tv～勝利の方程式～』（テレビ東京）、『スーパーJチャンネル 金曜自由区』（テレビ朝日）、『ハッケン!』（日本テレビ）などの番組制作に携わる。2006年からライターとして活動。『週刊ポスト』（小学館）を軸に取材活動を行う。17年2月には介護職員初任者研修（旧ヘルパー2級）を修了し、現在は介護・福祉を中心に取材・執筆している。

PRESS RELEASE

2021年11月29日

第28回

『小学館ノンフィクション大賞』 について

『小学館ノンフィクション大賞』とは？

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登竜門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『マグロ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。

募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。

PRESS RELEASE

2021年11月29日

28回を数える今回は、本年8月末日に募集を締め切り、100を超える力作が寄せられました。この中から次の4作が、本日午後5時から如水会館（東京・千代田区）で開かれた最終選考にかけられ、星野博美、白石和彌、辻村深月の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

最終候補作

『歌舞伎町ネバーランドで 女たちは今日も踊る』

宇都宮直子

『総連と民団 相克の七〇年』

竹中明洋

『マイホーム山谷』

末並俊司

『没義道—MOGIDO—』

村山康文

※タイトル五十音順

賞金	大賞＝300万円（複数受賞の場合は分割）
発表	受賞作は12月発売号の『週刊ポスト』『女性セブン』及び小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
選考委員	星野博美（ノンフィクション作家）、白石和彌（映画監督）、辻村深月（小説家）

※受賞を祝う会は、社会情勢を踏まえた上で、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。